

示I-49 進行食道癌における形態計測学的検討

国立嬉野病院 外科

新海清人、木田晴海、久野 博、柴崎信一、矢野 洋、能村正仁

【目的】進行食道癌の形態計測後、パラメーター比を求め、臨床病理学的検索、重回帰分析にて検討した。

【対象および方法】食道癌 22 例。平均年齢 75.6 才。標本計測は (a) : 縦径 (b) : 露出部横径 (c) : 露出部縦径 (d) : 非露出部縦径 (e) : 潰瘍底高 (f) : 非露出部横径のパラメーターを設定しパラメーター比を算出。

【結果】高分化型 wel 2 例、中分化型 mod (高分化型優位 mod1 5 例、低分化型優位 mod2 7 例)、低分化型 por 7 例。a0 5 例、a1 8 例、a2 6 例、a3 2 例。n (+) は 18/21 (85.7%)。 (a) / (f) 0.30 > wel 0 例、mod1 1 例 mod2 5 例 por 5 例。a0 2 例 a1 3 例 a2 4 例 a3 2 例。n (+) は 11/18 (61.1%)。潰瘍浸潤型 6 例、潰瘍限局型 3 例、びまん浸潤型 2 例 分類不能型 1 例。0.30 < wel 2 例 mod1 4 例 mod2 2 例 por 2 例。a0 3 例 a1 2 例、a2 4 例 a3 0 例。潰瘍浸潤型 5 例、潰瘍限局型 2 例、限局腫瘤型 1 例、分類不能型 2 例。n (+) 7/18 (38.9%)。

【結語】①外膜、食道内腔に進展するものは潰瘍限局型および隆起型で、wel~mod1 が多い。a2、a3 目立つ。②食道壁への浸潤傾向があるものは潰瘍浸潤型~びまん浸潤型で、低分化型が主体であり、高度のリンパ節転移あり。

示I-50 ヒト食道癌培養細胞株における細胞増殖関連因子の発現に関する免疫組織化学的検討

富山医科薬科大学第2外科

田内克典、斎藤智裕、湯口 卓、斎藤光和、斎藤文良、新保雅宏、山下 巖、榊原年宏、清水哲朗、坂本 隆、塚田一博

【目的】食道癌の悪性度の指標として切除標本における各種細胞増殖関連因子の発現・消失が検討されているが、その意義に関しては議論の多いところである。今回我々はヒト食道癌培養細胞株における細胞増殖関連因子の発現を免疫組織化学的に検討し報告する。

【対象・方法】当科で樹立したヒト食道癌培養細胞株 7 株を対象とし、p53、p16、cyclin D1、PCNA、Ki-67 の発現を免疫組織化学 (DAKO 社製 LSAB Kit) を用いて検討した。

【結果】p53、p16、Ki-67、PCNA はすべての細胞株で腫瘍細胞の核に一様に陽性像を認めた。cyclin D1 はSGF5、SGF9、SGF12 の一部の細胞の核に陽性像を認め、SGF3、SGF7、SGF8、SGF11 では陽性像を認めなかった。

【考案】cyclin D1 の発現のみ細胞株間で差を認めたことより、cyclin D1 の免疫組織化学的検討は食道癌の悪性度の指標となりうる可能性が示唆された。

示I-51 胃癌患者の術前化学療法における切除標本の DPD の測定意義

田附興風会医学研究所北野病院 外科

岩田辰吾、河田健二、小濱和貴、奥山裕照、橋田裕毅、中村吉昭、牧淳彦、滝吉郎、高林有道

【目的】5-FU を主体とした術前化学療法を施行した胃癌患者の薬剤耐性機構を解析するために腫瘍部の Dihydropyrimidine dehydrogenase (DPD) 活性を測定した。

【対象と方法】胃癌患者 25 名を術前化学療法群 (11 名、G1) と手術単独群 (14 名、G2) に分けた。両群の患者の背景因子に有意差はなかった。胃摘出後腫瘍部 (Tu) 及び非腫瘍 (Nor) 部を液体窒素にて凍結し組織の DPD 活性 (nmol/min/mg 蛋白) を測定した。

【結果】Tu-DPD、Nor-DPD は G1 (42.0、39.3) の方が G2 (34.6、36.9) より高かった。G2 群内では病期が I から IV に進行するに従い Tu-DPD は 43.5 から 22.6 に低下し T、N 因子についても同様の傾向がみられた。G1 では IV 病期の患者の Tu-DPD は 35.0 であり G2 のそれ (22.6) に比較して活性が上昇した。

【結論】DPD 活性は Stage I V 胃癌では低下し 5-FU 投与により活性が上昇することが判明した。DPD 活性は胃癌治療の選択に有効な情報を提供する可能性が示された。

示I-52 生存期間からみたIV型胃癌の特徴と治療

神奈川県立がんセンター外科3科

吉川貴己、鈴木一史、小林 理、西連寺意勲、本橋久彦

【方法】1: Retrospective study IV型胃癌251例を対象とし多変量解析にて検討した。2: 非切除例に対する免疫化学療法 この結果を基に、1997年7月より非切除例3例に対してOK432併用low dose FLP療法を施行した。【結果】1: Retrospective study 切除例190例の多変量解析では、根治度C/A、B、腹膜播腫P2、3/0、1が有意なrisk factorであった。根治度A、B症例を3年以上生存群(n=23)、3年未満再発死亡群(n=45)にわけ、多変量解析を施行、有意となった因子は、漿膜浸潤の有無とOK432を含めた免疫化学療法の有無であった。非切除例、根治度C症例の平均生存期間はそれぞれ、82日、253日と不良であった。2: 非切除例に対する免疫化学療法 抗腫瘍効果はNCであったが、PSと食事摂取量は全例で改善した。

【まとめ】非切除例、根治度C症例ではQOLを考慮した治療を、根治度A、B症例では術後の適切な免疫化学療法が重要と考えられた。また、非切除例に対して施行したこの免疫化学療法の有効性が示唆された。